

1 平成17年度小教研道德部会研究主題

自己を見つめ、心豊かに生きる子どもを育てる道德教育

2 研究主題の趣旨

(1) 研究主題設定の背景

これまで本県においては研究主題を「豊かな心をもち、よりよい生き方を求める子どもをはぐむ道德教育 一体験を生かした心に響く道德の時間」と設定して、研究・実践を進めてきた。子どもたちは総合単元的な道德学習に取り組み、さまざまな体験を重ねながら、豊かな心をはぐんできた。この中で、よりよく生きたいと願い、自己課題をもって道德学習を進める姿も見られるようになってきている。よりよい生き方を一層主体的に求める子どもを育てていくため、子どもの願いや自己課題に着目して研究・実践を進めていきたい。

さて、平成15年3月の中教審答申においては、これからの教育は「21世紀を切り拓く心豊かでたくましい日本人の育成」を目指すこととされ、「豊かな心と健やかな体を備えた人間の育成」が目標の一つとされている。教育の現状は、家庭や地域の教育機能の低下、社会体験や自然体験の減少、社会全体のモラルの低下などのために、豊かな人間性をはぐんでいくことが難しくなっている。青少年の規範意識の低下、非行や犯罪の増加も懸念され、生命を大切にすることを強く求められているところである。そのような中、豊かな心をはぐくみ、道德的実践を充実させることが望まれるのである。

また、同答申では、「自己実現を目指す自立した人間の育成」も目標の一つとして挙げられている。道德教育においても、子どもが自己実現を目指す中で、主体的に豊かな心をはぐくみ、心豊かな生き方ができるようにすることが大切である。

そこで、子どもが自分のよさや可能性を信じ、自己課題をもって自己実現を目指しながらよりよい生き方を求めていくこと、子どもが道德的価値の自覚を深めて実践することを重視する意図から本研究主題を設定した。

(2) 研究主題について

「心豊かに生きる」とは

ここでは、「心豊かに生きる」とは、「自分を大切にし、他と共生しながら自己実現を目指して生きる」ことであると考えたい。

わたしたちは、自分の心を偽って自分をおとしめる行いをすれば心に痛みを感じるし、自分の願う生き方をすれば喜びを感じる。また、まわりの人を思いやって心が通い合ったとき、自然や芸術と出会って感動したとき、誰かの役に立つことができたときなどには、自らの心が温かくなり、満たされるのを感じる。人間は「自分自身」、まわりの人や自然などの「他」を尊重し、共生していきたいという思いをもっているのである。

この、自他を尊重し、共生していきたいという思いがしっかりと心の中にあるとき、その人の心は豊かであると言える。そして、その豊かな心は単に心の中の思いにとどまっているのではなく、積極的に行動として表されたり、無意識に行動となって表れたりして来るであろう。その姿は、決して自分を偽って自律したり他と共生したりしている姿ではない。自分のよさを発揮し、自己実現を目指して生きる中で、その人のもつ豊かな心が行動となって表れてくるのであり、より豊かな心をはぐくむべく生きていくことがその人の自己実現へとつながっていくのである。

どうして「自己を見つめる」なのか

よりよい生き方をしようとするならば、わたしたちは自分自身のことをふり返り、自分の生き方へと反映させていかなくてはならない。自分自身をふり返ることによって、これからの自分の生き方を見通すことができるのであり、心豊かに生きることもできるのである。

人間は、「心豊かに生きたい」という願いをもっている。その願いは意識の下に隠れていたり、漠然としたものであったりすることも多い。しかし、何かの契機によって、「自分の生き方をさらによいものにしたい」と意識することがある。そして、この思いは、自他とのかかわりにおいて「どのような生き方が大切なのか」「どのように生きればよいのか」という問いかけへと発展し、自己との対話が始まる。問いかけが深ければ深いほどに、人は自分自身と向き合い、どのように生きることが大切なのかと考える。このとき、今までの自分の価値観を確かめたり見直したりしながら自分自身をふり返っているのであり、自己を見つめている。このことによって、人は未来に夢と希望をもって自分なりの自己像を描き、心豊かに生きることができるようになるのである。

道德教育において、心豊かに生きる子どもを育てるためには、子ども自身が「自分の生き方をさらによいものにしたい」と意識して、自己を見つめるように導くことが大切である。そのかなめとなる道德の時間を中心に、その支援の在り方について考えたい。

まず、子どもが「自分の生き方をさらによいものにしたい」という思いがもてるようにすることが大切である。偶然に頼っていたのでは、その思いをもつことは難しい。人はかかわりの中で生きている。自他とのかかわりの中から子どもが

自己を見つめる契機となることを仕組み、あるいは子どもがあまり意識していない事柄に注目させることによって課題をもつことができるようにするのである。

次に、道徳の時間にはそれぞれの課題に添って、子どもが自己への問いかけや自己との対話を深めるように十分に留意しなくてはならない。そのことを通して、道徳的価値の自覚を深め、より心豊かな生き方へと導くようにするのである。これまでの自分自身をじっくりと見つめ直すことで、心豊かに生きる意欲を高めたり、新たな自己課題に気付かせたりすることができ、実践への意欲を高めることもできるであろう。

さらに、道徳の時間にもった意欲や課題を実践することができるための支援を行いたい。道徳の時間に学習したことは、実践を通してより確かなものとなったり、新たな課題となって発展したりする。道徳的実践のための場を設定したり、一人一人がそれぞれに道徳的実践に取り組んでいくことができるように工夫するなどの支援をしていきたい。また、道徳的実践を通して、心豊かな生き方のよさや心豊かに生きる自分のよさに改めて気付いたり、新たな自己課題をもったりできるよう、実践についての自己評価も大切にしたい。

3 研究内容と留意点

(1) 子どもが主体的に取り組む道徳学習の構想

- ・日常的な体験や体験活動を道徳学習に生かす構想の工夫
- ・子どもの自己課題を大切にされた総合単元的な道徳学習の構想
- ・「心のノート」を位置付けた学習計画の在り方

この研究内容について深めるには、子どもの意識を予想しながら、道徳の時間の学習と、各教科等での学習や日常的な体験が有機的に関連するように構想することが必要である。

総合単元的な道徳学習は主題に迫るための有効な方法である。総合単元的な道徳学習においては、学習の過程で子どもがもつ意識を予想して、子どもが意識をつなげていくことができるように単元を構想したり、複数の道徳の時間を通して子どもの思いや考えが深まったり広がったりするように構想したりするための工夫が求められる。

(2) 自己への問いかけを深め、道徳的価値の自覚を図る道徳の時間の在り方

- ・子どもの悩みや心の揺れなどをとらえた道徳の時間の在り方
- ・子どもの体験等から生まれた課題を生かした指導方法の工夫
- ・心豊かな生き方への自信を深めたり、新たな自己課題へと発展させたりするための工夫
- ・道徳的価値の自覚を深める「心のノート」の活用

本主題の求める道徳の時間の授業は、子どもが課題をもって、主体的によりよい生き方を追究していく授業である。したがって、道徳の時間に学習する事柄が、「自分にとって大切なことである」「考えを深めていこう」ととらえられるようにすることが重要である。その上で、子ども自身が自己への問いかけや自己との対話を行いながら学習を進めて自分自身を深く見つけ、道徳的価値の自覚を深めるようにしていきたい。

子どもは道徳的価値の自覚を深め、自己課題をもつことで心豊かに生きようとして実践することになる。その道徳的実践を通して、心豊かに生きることも実現していく。子どもが自己課題に添って道徳的実践ができるための工夫も忘れないようにしておきたい。

(3) 自己を見つめることができる資料の開発・活用

- ・子どもにとって切実性があつたり、課題をもつことができたり、強く心を揺り動かされたりする資料の開発・活用
- ・子どものさまざまな体験、教師の体験や願い、地域の文化や特性、保護者や地域の人々の生き方や願いなどを素材とした、子どもの心に響く資料の開発・活用
- ・多様な視聴覚教材や情報通信ネットワークなどを利用した資料の開発・活用

道徳の時間において、子どもが自己を見つめ心豊かな生き方へとつなげていくことができるように学習を深めるためには、どのような資料を用いるかが非常に重要である。子どもの課題に添っている、深く共感できるなど、子どもの心に響く資料を取り上げるようにしたい。そのためには既存の資料を取り上げるだけでなく、多様な素材に目を向け、表現方法を工夫することも視野に入れながら新しく資料を開発し、効果的に活用して授業を展開することも重要である。

(4) 「豊かな体験」を道徳の時間に生かす工夫

- ・体験をより豊かなものとして意識させ、道徳の時間に生かす工夫
- ・体験から自己への問いかけや自己との対話を導く実践
- ・「心のノート」を活用して、体験を道徳の時間に生かす工夫

わたしたちは生活の中でさまざまな体験をする。その中にはわたしたちの心に響くものがある。道徳的判断を迫ったり、人間としての在り方や生き方を投げかけたり、道徳的心情を揺さぶって感動させるものがある。それらは、わたしたちの心に自己への問いかけや自己との対話を呼び起こす体験である。こうした体験を、ここでは「豊かな体験」と考えたい。したがって、学校や地域での体験活動ばかりが子どもにとって「豊かな体験」であるとは限らない。日常の何げない体験が「豊かな体験」となることもある。

道徳の時間の学習との関連を図るとき、その体験が「豊かな体験」となるよう場を工夫したり、これまでの体験を自己への問いかけや自己との対話が生まれるようにふり返りの工夫をしたりすることなどによって、子どもの心を通り過ぎてしまう体験も、「豊かな体験」とすることができるであろう。そこから子どもの課題へと発展させることもできるであろう。

(5)心豊かに生きる子どもを育てる評価の在り方

- ・子どもが自ら心豊かに生きようとするための自己評価の在り方
- ・子どもの体験を通しての思い、道徳的価値の自覚、自己課題などを評価し、道徳学習の指導法や道徳の時間の構想の改善に生かす工夫
- ・指導法や指導計画等を評価し、その改善に生かす工夫

自己を見つめることはまさに、自己評価である。その内容がいつも表現されるわけではないが、自己評価なくして本研究主題に迫ることはできない。今までの自分の生き方や考え方を見つめ、これから自分の求めようとする生き方を考えたり、自分の学び方について確かめたりしていくことを通して、子どもは、自己を見つめる目を確かなものとしていくのである。したがって、効果的に自己評価を学習の中に位置付けていくことは、有力な支援となる。

また、子どもの道徳性をとらえ、子どもの学びを個に即して継続的に評価し、それをもとに学習計画や道徳の時間の指導がよりよいものになるように工夫したり、一人一人の学びに対して個への支援に生かしたりしていくことによって、「自己を見つめ、心豊かに生きる子ども」をより効果的に支援することができる。

なお、教師の指導の在り方を検討し改善するための、指導法や指導計画等の評価方法についても積極的に研究を進めたい。

(6)家庭・地域社会と連携したり、校内で協力したりして道徳教育を進める工夫

- ・家庭・地域社会と連携を進め、心豊かに生きる子どもをはぐくむ工夫
- ・家庭・地域社会と連携を深める「心のノート」の活用の在り方
- ・校内で協力して心豊かに生きる子どもを育てる実践

家庭や地域社会との連携を進めることによって、学校における道徳学習への理解が深まり、指導効果が高まったり、子どもの体験や実践を充実させたりすることが期待できる。家庭や地域社会においても心豊かに生きることができるよう、連携を図っていきたい。また、校内の職員が担任教師と協力して指導したり、励ましを与えたりするなどのかわりによって、子どもへの支援はより大きな効果を上げることができよう。